

	評価委員会の評価結果	研究開発機関の対応方針
各研究部の評価	<p>(17)薬理部</p> <p>【①研究、試験、調査及び人材養成等の状況と成果(厚労省施策又は事業への貢献を含む)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 毒性評価法や中枢神経系への影響をはじめとし多数の課題で研究成果を上げている。健康への影響を評価する研究は、国立衛研の複数の部が関係しているので、全体でまとまった研究になるように連携が必要である。 <p>【②研究分野・課題の選定(厚労省施策又は事業との関連性を含む)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 他部の研究と重複する部分も多く、役割分担やより大きな成果へ繋げるための調整が望まれる。産との共同研究や連携を視野に入れた新しい研究分野・課題の選定への挑戦を期待する。 <p>(18)病理部</p> <p>【①研究、試験、調査及び人材養成等の状況と成果(厚労省施策又は事業への貢献を含む)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 人材養成に留意していることが伺え、その成果も出ていると評価する。論文の数は十分であるが、質の点検が望まれる。 ◆ 成果を行政に委ねるだけでなく、一般の外部へうまく情報として提供することを期待する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・内分泌かく乱化学物質研究グループ ・ニューロサイエンスグループ ・発生グループ ・トキシコゲノミクスグループ ・ナノ物質毒性研究グループ ・発癌グループ <p>(17)薬理部</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 健康への影響の評価は薬理部だけの問題ではなく、必要に応じて関係する他部と連携している。例えば、アクリルアミド問題の時は、代謝活性化と神経毒性については薬理部が担当し、病理部と連携した。今後も、安全性生物試験研究センターあるいは研究所全体として対応していく所存である。 ● 薬物代謝については他部の研究と一見重複して見える課題もあるかも知れないが、これはそれぞれの部の所掌業務を発展させる上で行っている場合やミレニアム・プロジェクトとして国立衛研の多くの部が協力して薬物代謝酵素の多型研究を行った場合がある。薬理部は毒性発現との関連に特化した代謝(トキシコキネティクス)について責任を持つ部として、また、長い薬物代謝酵素についての研究歴を有する部として、このプロジェクトに協力してきた。今後は、トキシコキネティクス研究を進めるとともに、課題の差別化を図って行きたいと考える。産との共同研究、連携についても、国内外を視野に入れ挑戦して行きたい。 <p>(18)病理部</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 毒性学・毒性病理学分野の研究者数は国内外において少なく、そのことが掲載論文の質が低めに評価される一要因となっているので、今後はもっと基礎研究を扱う雑誌への投稿に努め、それを通じて毒性学・毒性病理学分野の雑誌の質的向上に貢献したい。 ● 学会の市民公開討論会などを利用して、研究者側からの一般への情報提供を図りたい。